

しも、漸くおもちやにて、機嫌をとり、寫しをはる。

六月十日 毎月十日は邸内の金比羅様の縁日なり

今朝、食事前、いつもの様に、お父さんに抱かれて門を出で、やがて、金比羅様に行きしが、

神前の鈴のがらくと鳴るを聞き、不思議そう

に上を眺め居りしが、暫らくして、忽ち父に抱

き付きぬ、聞きなれざれば、恐ろしと思ひしな

るべし。

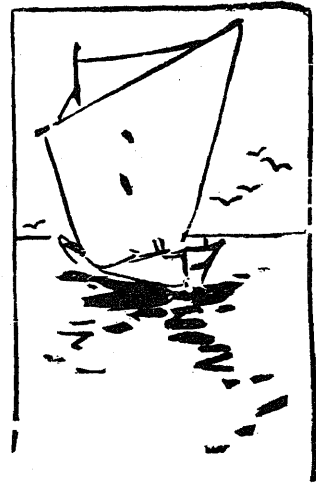
夕食後、父に抱かれ母と共に金比羅に行く、隣

家の三郎も、其母に抱かれて、神樂を見て居た

り、貞一の母三郎の傍に行き、三郎を抱かんと

て手を出せしを見て、貞一は、聲をあげて泣き

出す



決死隊

佐々木信綱作歌

一 天皇と國家とに盡すべく

死地に就かむと希ふ

二千餘人の其中に

七十七士ぞ選ばれし

二

今宵ぞまさに軀を棄て、

旅順港口閉塞がむと

忠勇無二のつはものは

今しも船を去らむとす

三

出で、ゆく人送る人

語はなくて手を握り、

別れを告ぐる真夜中を

マストの上の星寒し、

四

浪の穂のみぞはの白く

あやめもわかぬ海原を

舷燈消してしづくと

死地に乗り入船五艘、

五

はつと閃めく探海燈

忽ち起る砲の音

敵は驚き騒ぎつゝ、

所定めず打出す

六

砲弾は霰と降りそゞぎ

海波立つ事三千丈

彼方此方を照り交はす

探海燈の物すゞぎ

七

何しに擾亂ぐ敵壘ぞ

可笑き敵の振舞や

鐵よりかたき此心

彈丸もいかでか貫かむ

八

敵の砲火を侵しつゝ、

港口深く進み入り

我船沈め歸りこし

わが忠勇の決死隊

九

あゝ勇ましの決死隊

七十七士の忠勇は

わが海軍の花にして

其名薫らむ万代に

青葉集

其の子

▲夏の飲みものは、麥湯こそよけれ、さる家にては
玄米を煎りて煮たる汁を茶の代はりに用ふと聞
侍り、

▲早くより子供に博物理科の思想を養はんことと

そ望ましけれ、さりながら、虫類を捕り來りては

ピンにて其脊中を刺し通し〜幾匹も并べて美麗

なる額に仕立て、室内を飾るなどは望ましからぬ

業なり、さるは生ある動物を骨董品と同視するな

り、研究にもわらで、動物を虐待するなり。

大人にもかゝることを娛樂とする人あり。

▲子供を研究することもよき事なり、されど心せ

ざれば、之と同じ過に陥るべし。

▲梅雨のづれ〜なるまゝに、かきふるしたる反

古などを、文庫の中よりより出でたる中に、次の

文句ありけり

あはれに、悲しく聞かるゝは、月いとさえたる

霜夜に、下駄の齒音高くひやかせながら、大路

を流し行く按摩の聲、まだ、明けやらぬ冬の朝

風の、音の絶間を流れて聞ゆる納豆賣る子のか